

第 4 章

カルマ・モナド

淡中 圈

仏陀は深い瞑想の中に潜った。輪廻の連鎖を断ち切らなければいけない。そこで仏陀は輪廻の連鎖をつぶさに眺めた。仏陀が見たのは、循環しながら、一巡りの最後にカルマを自らに引数に受け渡して末尾再帰する存在だった。そうしながら自らも少しずつ変化させ、時には大きくホットスワッピングする。それこそ輪廻だ。

仏陀は出家する前に、計算数学について多少学んでいたのも、それが何かわかった。 A から B への単なる関数 $A \rightarrow B$ ではなく、様々な余分のものを運びながら、それでも $A \rightarrow B$ と $B \rightarrow C$ の合成ができる概念。それはすなわちモナドだ。

仏陀は、一切生者がカルマ・モナドであることを悟ったのだ。

仏陀は続いてカルマの中に潜り込んだ。カルマは継続モナドの一種のように見えた。すなわちカルマの中には、これから起こるであろうことの情報が陽に入っていて、通常はそれが起こるのだが、輪廻の進展の仕方によってそれが変化するので。

仏陀はそこに活路を見つけた。ただの関数ならば $A \rightarrow B$ という型を持っていれば、 A の次は B にならなければいけない。しかし継続モナドならば、未来に影響を与えることができるのだ。

仏陀はカルマの中で継続をハックし、輪廻の過程を中断させることに成功した。 $A \rightarrow B$ の流れの中で、 B にはいかず、全ての関数呼び出しの大元の元へと帰ってしまうのだ。これすなわち例外である。これこそ衆生の救いだ。

救われたい衆生は皆、例外を投げて、トップレベルまで上がってスタックトレースを吐き出すのだ。

参考文献

- [1] ライプニッツ, ゴットフリート. 清水富雄/竹田篤司/飯塚勝久 訳. モナドロジー 形而上学叙説. 中央公論社〈中公クラシックス〉. 2005.
- [2] Dee, John. *The Hieroglyphic Monad. Red Wheel/Weiser; New edition editon.*

2001.

[3] Bruno, Giordano. *De monade, numero, et figura. Iacobum Fischerum. 1614.*